



TITLE:

讀者欄：寄書歡迎

AUTHOR(S):

CITATION:

讀者欄：寄書歡迎. 天界 1935, 15(174): 475-476

ISSUE DATE:

1935-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167106>

RIGHT:

讀者欄 寄書 歡迎

滿洲國の標準時を改むる必要を認めない

(山本一清博士の忠言に答ふ)

滿鐵地質調査所 新 帶 國 太 郎

花山天文臺長山本一清博士は雑誌天界第170號(昭和10年6月刊)中に一文を投じ、滿洲國の標準時を改めよと題して記され、その抜冊を一部筆者にも恵まれた。その本文を熟讀翫味した結果、筆者は聊かその所見を異にするを以て、茲に此の一文を草して山本博士に呈し、その御厚意を感謝すると共に筆者の蒙を啓かれんことを希ふ次第である。

山本博士が、現在の滿洲國の標準時を1時間繰上げて、今日日本に採用せられつゝある東經 135度子午線の標準時と同様に改めよとの御忠言は、筆者個人の意見としては遺憾ながら賛同いたし兼ねる。その理由は博士の有利と考へらるゝ多くの條項が、我が滿洲國の大多數の住民には却て少しも有利の事實と考へられないからである。即ち我が滿洲の多數の住民の實情を御存じない爲めにかゝる企てをなさるのでは無いかと筆者は思ふ。勿論筆者として凡て滿洲國の事情を知れるわけではないが。

我が滿洲國の多數の住民は大部分が農民である。それ等の農民は春から夏、夏から秋にかけて所謂農繁期には、殆ど毎日午前2時前後に起床し、遅くも3時半頃迄(北方ではもつと早い)には既に野らの仕事にとりかゝり、日没までせつせと働き、歐米人乃至は日本内地の朝寝坊氏等

の夢想だもしない日光節約 Daylight-saving を殆ど完全(敢えて完全といふ)に實行して居る。斯かる多數の住民の爲めに何の必要があつて1時間標準時を繰上げることが敢えてするか。冬季に入つても彼等の大多數は午前5時には起き出で、まだ暗い中からせつせと働いて居るのを御存じないのか。假に1時間繰上げたとして彼等には博士の仰せらるゝ何等の經濟的生活の合理化が出來ようと思はれないし、況んや保健問題などについては一顧の價値を認められないと信ずる。

今日日滿兩國に於て唯1時間の差異あることが、交通通信上に單一を妨げるだけの多少の不便はあるが、之を改めたとしてその不便を十分に償つて餘りある程の利益を認め兼ねるばかりでは無い。不自然なる標準時の變更により、却て天然事象の觀測その他の上に至大の不便のあることは誠に忍ぶべからず。若し此の自然の大法に敢えて變更を加へてもよろしとするならば、北米合衆國その他の大國が何を忍んで幾つかの標準時を持たう。此の場合天地自然の大法に従ふのは寧ろ吾等の責務とさへ感ずる次第である。

彼の隣接せる中華民國と同様の時制上の一ブロックとなつたとて自然地理上の事である以上、何等の顧慮を要しない、況んやソ國が標準時を自然よりも更に總

體的に1時間早めて隣接せる滿洲國と2時間の差を生ずる事位は何等の考慮を煩はす必要を認めない。もともと不自然な彼等の技巧をまねる必要は毛頭無いと信ずる。是故に吾等は最も自然に近い東經120度子午線の標準時を持続したき希望を有

する。

聊か私見を吐露し、併せて山本博士の滿洲國の爲めに盡さるゝ御厚意を感謝し且敬意を表する次第である。

(昭和10年7月9日稿)

新帶國太郎氏に答へて

上の新帶氏の文を読んで、學究者のノンキさと、論理の片手落ちとを次の四點に就て指摘する以外に、何の意味も無いものであると思ふ。

(第一) 住民の大部分が農民である國は滿洲以外に、日本もロシアも、其の他にも例は多からう。此等の農民が、腕には腕時計をはめ、家には壁時計をかけて、日夜、時計とにらめくらして農業を營んでゐるや否や?! 事實彼等は人工の時計を超越して天然生活をしてゐるのであるから、標準時を變更しても、彼等は決して1時間早く起床する心配は無いのである。吾等の主張は毎日毎時多少とも時計と共に生活する文化人の日常生活のプログラムを合理化するにある。こんなバカバかしい點を擧げて反對せられる新帶氏のマジメさを疑ひたい。

(第二) 東經120°の子午線よりも135°の線を採用するのが滿洲のために“不自然”だと言はれる新帶氏は、果して滿洲の地圖を開いて見られたことがありや、否や? 新京やハルビンの經度は何度であるか?!

(第三) “北米合衆國其の他の大國”が幾つもの標準時を定めてゐるのと吾々の問題とは全く無關係ではないか! 日本だつて滿洲だつて、若しも東西に廣く延びてゐる國ならば、やはり幾つもの標準時が必要になる。之れと、時計を1時間進めることとは全然別問題である。

(第四) ソ國人のやることを何でもかでも總て“不自然な技巧”と嘲けられるが、之れは全く學者に不適合ひな盲目的感情ではないか! ソ國のものだつて、良い點は良いと判斷しなければならない。

答辯は、以上で充分であらう。(1935年九月1日)

(山本一清)